

うだ。

さらに、十二月十三日にも、諸国郡・国分寺・国分尼寺に陰陽書の法によつて、毎年、害氣を鎮めさせるやうにすることが決められた。これも、天然痘への対策として打ち出された措置であらう。

しかも、天然痘の影響は、一年だけでは終らなかつた。次の斉衡元年（八五四）二月十三日に、災疫を除くため、大和国に灌頂経法を行はせたり、同年三月二十三日、石見国に三万五千束の稲を飢民のためにふるまはせてゐるのなども、天然痘の猛威に対抗する策に他なるまい。

前年の悪疫の爆発的な流行は凶作を招き、その深刻な影響は、さらに翌斉衡二年まで尾をひいてゐる。

それは、大洗の磯の崎で、大奈母知・少比古奈命の示現がある、わづか一年前のことだ。

悪疫治癒の神

以上のやうに見てくると、かの託宣に「今、民を度はんがために、さらにまた来たり帰れり」とあつたことも、決して漠然とした民衆の救済を述べたものではなく、なほ生々しい天然

痘による社会の傷痕を癒し、二度と同じやうな惨害の起こらぬことを保証する神恵として、人々の心に響いたはずだ。

そもそも大奈母知・少比古奈命とは、いかなる神徳の神にましますか。

『日本書紀』神代上、第八段第六の二書に「かの大己貴命と、少彦名命と力を戮せ心を二つにして、天下を経営る。また顕見蒼生（現世の人民）及び畜産のためは、その病ひを療むる方を定む」と明記する。まさに悪疫を治癒せしめ、防遏する神徳をお持ちなのである。

ならば、朝廷がこの神をただちに官社に加へた動機も、よく分かる。さらに、衆生の病苦を救ひ、無明の痼疾を癒すといふ「薬師」の神号が贈られてゐるのも、もつぱらその方面の神徳発揚を願つてのことに他ならなかつたであらう。

しかも『常陸国風土記』に記されてゐるやうに、常陸国こそ遠い昔の人が「常世の国」（不老不死の理想世界）と呼んだ地とする観念があつた。そこに「古事記」「日本書紀」に常世の国に渡つたと伝へてゐる少比古奈命が出現したことは、至極もつともなごとと受けとられたのではあるまいか。

（歴史的仮名遣いを使用）

（社報「大洗さま」第十四号より抜粋）

御祭神 大己貴命（おなむちのみこと）
少彦名命（すくなひこのみこと）

大己貴命は世にたいこく様とも云われ、慈悲深く、福德を授ける神として尊崇され、少彦名命は医薬の祖神と仰がれ万民の難病を救う神として信仰されております。

大洗磯前神社

茨城県東茨城郡大洗町磯浜町六八九〇

電話 〇二九二六七一六三七（代）

FAX 〇二九二六七一七五五七

交通

・JR常磐線水戸駅下車 バス大洗水族館行にて神社前下車
・鹿島臨海鉄道 大洗鹿島線 大洗駅下車タクシー
・常磐自動車道 友部ICの經由 北関東自動車道 東水戸道路
水戸大洗ICより約十五分

ホームページアドレス <http://oarai-isosakijinja.or.jp>

「大洗さま」の示現

拓殖大学客員教授 高森 明勲

大洗磯前神社の起源

神さまは普通、人の目には見えない。だが目に見えないからと言って、単純にその存在を否定してしまふのは早計だ。ならば一体、どうやって人はその存在を知ることができるのか。

それは、神さまのさまざまな「働き」を通してである。

大洗磯前神社の起源は、さうした神さまの働きがはつきりと示された典型的な事例の一つと言へるだらう。

六国史の五番目にまとめられた『日本文徳天皇実録』にこんな記事が載っている。

——平安時代の斉衡三年（八五八）十二月二十九日、常陸（今の茨城県のあたり）の国庁から朝廷に不思議な報告があった。

鹿島郡の大洗の磯の崎に、新しく神が降ったといふのである。

ある夜、地元で海水を煮て塩を作つて生計を立ててゐた者

きを通して、まぎれもなく大奈母知・少比古奈命の示現が信じられたのは確かだ。

ここに大洗磯前神社が創建されることになった。

仁寿三年の天然痘大流行

大洗磯前神社は早速、祭神が示現した翌年の天安元年八月七日に官社に列された。早々に公けの待遇に預かることになったのである。つづいて同年十月十五日には「薬師菩薩名神」との神号も贈られてゐる。

つい前年の年末にその示現が報告されたばかりの祭神への対応としては、この展開の早さは尋常ではない。「薬師菩薩」といふ仏教的な語を含んだ神号も、ほとんど類例を見ない。

そもそも、地方の「神社」の祭神の示現をめぐる詳しい経緯が正史に掲載されてゐること自体、すぐる異例だ。

その背景に、何か特別な事情が潜んでゐたのではないだらうか。「一応、そのやうに探りを入れてみたくなるのも当然だらう。」

もちろん、史料上の制約があるので確実なことを知るすべはないが、「一気になることがある。」

が、海のかなたを眺めると、洋上が輝き、ほとんど天に届かんばかりのありさまだった。その神異なできごとがあつた翌朝、今度は海岸に高さ二十センチほどの、世にも珍しい形をした岩が二つ、忽然と姿を現した。さらにその次の日には、二つの岩の周囲に、二十個ばかりの小石が、あたかも侍者としてはべつてゐるかのやうに集まつてゐた。その形はお坊さんに似て、ただ目と耳がない。

そんな奇妙なことが続いてゐた折に、別のある人物に神が憑つて託宣を下した。

「われはこれ、大奈母知・少比古奈命なり。昔、この国を造り訖へて、去りて東海に往けり。今、民を度はんがために、さらにまた来たり帰れり」と。

——何とも不思議な話である。

だが常陸・帯の行政をつかさどる国司・当時の長官は仲野親王、次官は藤原近主が、朝廷にまつたく事実無根の報告をしたとは考へにくい。報告のもとになった神秘なできごとが、何らかの形で実際にあつたことは疑ふには及ばないだらう。その事実が、すべて報告の通りだったかどうかはともかく、人々にはそのやうなものと受けとられ、かかる神の「働

それは、大奈母知・少比古奈命の示現があつた斉衡三年から三年さかのぼつた仁寿三年（八五三）に、天然痘が広く流行し、おびただしい死者が出た事実である。

『文徳実録』同年二月の記事には、「この月、京師（京都）及び畿外（諸地方）に多く皰瘡（天然痘）を患ひ、死者はなほた衆し。天平九年（七三七）及び弘仁五年（八四）にこの瘡患あり。今年またこの疫をまぬかれざるのみ」と出てくる。

現代ですでに世界保健機関（WHO）によつて絶滅宣言が出されてゐる（一九八〇年）が、痘瘡ウィルスの感染によつて起こる天然痘の死亡率は、恐ろしく高い。この時、じつに数十年に一度の難病の大流行があつたのである。

同年四月二十六日には、天然痘の流行への対処の一環として、罪人の赦免や未納のみつきもの（調庸）の免除などが行はれてゐる。

また、五月四日には、相模・上総・下総・常陸・上野・陸奥の六ヶ国、同十四日には、武蔵・信濃の両国に命じて、一切経を写させてゐる。これらは、写経の功德によつて、天然痘の蔓延を少しでもくひ止めようと図つたのに違ひない。これを見ると、このたびの天然痘は東日本、とくに関東方面で猖獗を極めたや

神への愛情と期待、力衰えて宝器と娘を奪われたやるせない寂しさ等々、須佐之男命の万感の思いが、交々に響きあっています。

かくして大穴牟遲神は、須佐之男命のお言いつけのままに、八十神をことごとく追放しました。名にし負う「大国主神」として、須佐之男命がオロチ退治によつてはじめた葦原の国の国作りを、しっかりと受け継いでゆくことになったのです。

国作りと天上・地下の加護

これ以降、「大国主神」の国作りは、さまざまな諸力の加護を得て進められてゆきます。

その国作りの第二の支援者は、他界から連れてきた妻、須勢理毘賣の内助の功と、その父須佐之男命の加護です。結婚当初は、各地の美女と浮名を流していた大穴牟遲神でしたが、須勢理毘賣の切ないお嘆きに触れ、あらためて毘賣と夫婦の契りを堅めたことによつて、義理の父たる須佐之男命の「他界からの加護」をも、正しくうけることができるようになったのです。

第二の支援者は、海の彼方より漂着した少名毘古那神です。かの二寸法師のようなこの神は、実は高天原の神産巢日之命の生みの子でした。天上の父神のお言いつけをうけた少名毘古那神は、大穴牟遲神と相携え、一致協力して国作りを行つてゆくこととなりました。大洗磯前神社に

おいても、二神が相並んで祀られている所以です。

第三の支援者は、のちの大神神社の御祭神、大物主神オホモノヌシノカミでした。少名毘古那神が国作り半ばにして常世国へ去つたのち、かわつてあらわれた大物主神は、「私を祭るならば、お前の国作りを助けてあげよう」と告げます。こゝして大国主神は「大和の地霊」ともいふべき大物主神の加護を受けて、葦原の国の国作りを完成へと導いたのです。

おわりに

大穴牟遲神が大国主神へと脱皮してゆく物語。それは、最も申しめられ、虐げられていた者が、次々と襲いかかってくる虐めや試練を、天上・地下の加護と恩寵、母や恋人、兎や鼠の助けによつて、ひとつひとつ乗り越え、国作りの統領へと成長を遂げてゆく物語でした。

そこには、世代から世代への受け継ぎが、この世ならぬ他界の力によつてもたらされることへの深い洞察と共に、「どんな底の逆境にあつても、生来の資質を腐らせることさえなければ、やがて自らをしっかりと花開かせることができるのだ」という父祖の讃え、子々孫々への熱いエールがこめられているのではないのでしょうか。

『古事記』が伝えてきた大穴牟遲神の感動的な物語をしみじみと噛み締め、現代の若者たちに、その醍醐味と訓えを、言い継ぎ語り継いで参りたいと念願しています。

(社報「大洗さま」第十六号より抜粋)

大洗磯前神社



御祭神

大己貴命 (おこなむちのみこと)
少彦名命 (すくなひこなのみこと)

大己貴命は世にたいこく様とも云われ、慈悲深く、福德を授ける神として尊崇され、少彦名命は医薬の祖神と仰がれ万民の難病を救う神として信仰されております。

茨城県東茨城郡大洗町磯浜町六八九〇

電話 〇二九一二六七―二六三七(代)

FAX 〇二九一二六七―七五五七

交通

JR常磐線水戸駅下車 バス大洗水族館行にて神社前下車
鹿島臨海鉄道 大洗鹿島線 大洗駅下車タクシー
常磐自動車道 友部IC經由 北関東自動車道 東水戸道路
水戸大洗ICより約十五分

ホームページアドレス <http://oarai-issosakiinjia.or.jp>

大穴牟遲神の物語

国学院大学助教 武田秀章

はじめに

大洗磯前神社の御祭神、大己貴命は、国作りの神として、医療の神として、広く仰がれています。「承知のように「大己貴命」は、「日本書記」の神名表記で、「古事記」では「貫して」「大穴牟遲神」との表記が用いられています。この「大穴牟遲神」の物語こそ、「古事記」でもっとも興味に富むサクセスストーリーにほかなりません。ここでは、「古事記」が伝える「大穴牟遲神」の物語を辿り、あらためてその神徳の特色、幅広い人氣の所以を窺っていきたいと思います。

大穴牟遲神

「古事記」によれば、そもそも大穴牟遲神は、須佐之男命の「六世の孫」に当たります。須佐之男命はいうまでもなく、オロチ退治によって出雲の国作りの祖神とされた神です。

須佐之男命が、オロチ退治によって始めた国作りを、完成へと導いた神こそ、大穴牟遲神、後の大國主神にほかなりません。しかし、大穴牟遲神は、当初、多くの兄弟（八十神）の中で最も卑しめられ、虐げられていた神に過ぎませんでした。このような惨めな神が、多くの兄弟をさしおいて、なぜ国作りを担う神へと脱皮することができたのでしょうか。その

なる逆境の中に突き落とすことになったのです。

八上毘賣に袖にされ、嫉妬に狂った八十神たちは、共謀して恋仇の大穴牟遲神の虐殺を企てます。八十神は大穴牟遲神を敗いて畏に嵌め、手間の山の麓（ふもと）でむごたらしく殺害しました。

ここで、大穴牟遲神の母親が登場します。息子（孫）の死を悲しんだ母親は、高天原に参上して、神産巢日之命（天上にあつて生成の働きを司る神）におすがりします。神産巢日之命は、天上から貝の女神お二人方を差し向け、蘇りの薬「母の乳汁」の作用で大穴牟遲神を復活させました。大穴牟遲神は、こうして母の必死の奔走、天上からの加護を得て、再生することができたのです。

しかし大穴牟遲神の命を狙う八十神の凶暴さ、残虐さはとどまるところを知りません。兄神たちは、大穴牟遲神を繰り返し畏に嵌め、執拗にその抹殺を企て続けます。

根の国の試練

追ひ詰められた大穴牟遲神は、紀の国の大屋毘古神なる神の示唆によって、祖神たる須佐之男命のいる地の底の他界「根の国」へと旅立ちます。そこそれは、生来の虐められっ子「大穴牟遲神」が、「大國主」へと飛躍する手がかりを掴むための旅でした。

待ち構えていた須佐之男命は、大穴牟遲神に数々の恐ろしい試練を

波乱万丈の経緯について、「古事記」は、周知の因幡の白兔のエピソードから語り始めます。

兎を救う

ある日、八十神たちは、絶世の美女、因幡の八上毘賣に求婚するための旅に出ました。かねて八十神から虐げられていた大穴牟遲神は、一行の荷物担ぎとしてお供をさせられます。

途中、八十神は、騙した鰐に皮を剥がれて苦しんでいる兎と出会い、また。兄神たちは、無知からか悪意からか、兎に出鱈目の治療法を教えました。兎の体は傷だらけとなり、その苦痛はいっそう増すことになってしまったのです。

しかし、後からやってきた大穴牟遲神は、兎の訴えに懇ろに、耳を傾け、正しい治療法を教え、真水で消毒し、蒲の花の花粉を塗す。兎の肌をすっかり治してあげました。こうして、大穴牟遲神こそが、他者の苦しみに耳を傾けてその病苦を癒す力を、将来の国作りの主にふさわしい優しさ（叡智）を、かくしもっていることが示されたのです。

天上の加護と復活

兎は、助けてもらったお礼に、大穴牟遲神と八上毘賣の結婚を予言しました。果たして毘賣は、八十神の求婚を退け、大穴牟遲神との結婚を宣言します。ところが、この「衝撃の結婚宣言」が大穴牟遲神を、さら

矢継早に与えます。

すなわち蛇の室の試練。ムカデと蜂の室の試練。火の試練。須佐之男命の本意は、大穴牟遲神を、自分の後継者にふさわしい、強くたくましい神へと鍛え上げることでした。

これらの試練を、大穴牟遲神は、恋人須勢理毘賣（須佐之男命の娘）や、野鼠の助けによって、ひとつひとつ乗り越えていきます。

やがて須佐之男命は、大穴牟遲神に、最後の試練、八田間の大室の試練を与えます。ここで大穴牟遲神は、須佐之男命の油断の隙を突き、恋人の須勢理毘賣を背負い、宝器の生太刀・生弓矢を奪い取り、もって根の国からの脱出を図ります。それまでは受身（辺倒）であった大穴牟遲神が、はじめて主体的かつ俊敏な行動を起こしたのでした。

後を追った須佐之男命は、よもつひらさが（あの世と）この世の境界において、疾走してゆく大穴牟遲神のうしろ姿をはろばろと見やりながら、次のように呼びかけます。

「お前がわが手で得た生太刀・生弓矢をもつて、八十神をことごとく追放し、おのれこそが大國主となれ。またわが娘須勢理毘賣を妻とせよ。わしの娘婿たるお前こそが、葦原の国の国作りを受け継ぎ、完成に導くのだ。こ奴よ」

須佐之男命のこのお言葉には、娘婿にして無二の後継者たる大國主